

吉井勇全集

第二卷

番町書房

吉井勇全集 第二卷 歌集 II

昭和三十九年一月二十日發行

定價一、六〇〇圓

著 者 吉 井 勇

發行者 東京都千代田區二番町二
大 島 秀 一

發行所 東京都千代田區二番町二
番 町 書 房

電話東京 (三三三) 六六五八
振替東京 一五八四四
印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社 昇 榮 社

落丁・亂丁はお取替えいたします。

© 1964 T. YOSHII printed in Japan

吉井勇全集記念品引換券

第 2 卷
歌 集 II
(8-4)

全 8 卷御購人の方に限り有効。
1 卷から 8 卷までの引換券を切りとり、完結次第
御購人の書店へ御渡し下さい。
引換に記念品を贈呈いたします。

4

番 町 書 房

責任編集 解説 木俣 修

吉井勇全集 第二卷 歌集Ⅱ 目次

鸚鵡杯

- 薔薇と唇 二 耽耽亭雜詠 二 酒みづき 三 旅愁 四 大禮行
三 生友死友 三 夢幼の卷 四

人間經

- 卷一 四 卷二 三 卷三 六 卷四 七 卷五 八

天彦

- 菲生の山峽 二 都廳抄 一六 羈旅三昧 二三 駿河路の歌 二三
伯方島雜詠 二七 海南閑吟 二五 洛中洛外 二五

風雪

- 富士讚歌 一七 富士初山 一七 岳麓會遊 一七 愛國百首 一七
聖北支 一八 北支畫信 一八 感慨抄 一八 祖父をおもふ 一八
自ら愧づ 一九 紀元節 一八 紀元二千六百年 一八 三つの春 一九
雄ごころ 一八 山峽の春 一九 山峽の秋 一九 物部川 一九 室
戸岬 二〇 旅を思ふ 二〇 溪鬼莊雜詠 二〇 遠天行 二五 海南
抄 二六 土佐消息 二九 夏日閑庭 三〇 山廬行 三〇 瀬戸内海
三三 洛北新春 三七 洛北花鳥譜 三九 放庵の繪に題す 三四 雲
坪の繪 三六 東丸神社 三六 土佐をおもふ 三七 梅ヶ島遊草 三六
おもひで 三三

朝

影

芋錢河童圖 三〇
 展 三六
 眞如堂 三七
 暑き日 三七
 限取 三六
 嵐の朝 三八
 蒼穹
 大文字の夜 三九
 蟋蟀 三九
 秋の心 四〇
 秋風歎 四〇
 李長吉
 三二
 曉閣 三二
 秋の空 三三
 酒鬼圖 三三
 竹を愛す 三三
 釋尊 三三
 片栗粉 三四
 八幡縁起 三四
 蝦蟆鐵拐 三五
 木犀 三五
 鞍馬山 三六
 凡人調 三六
 天の聲 三七
 醍醐山路 三七
 秋深し 三八
 輝く大八洲 三六
 黑暗暗 三九
 鐘聲 三九
 滴瀝 三五
 傷兵の歌 三五
 時代祭 三五
 雄心 三一
 龍虎抄 三五
 朝ごころ 三三
 明治節 三三
 風邪ごち 三三
 續蕉翁語錄 三三
 獅子吼 三三
 籠居 三五
 訃報 三五
 室戸岬 三六
 土佐路 三六
 柿 三七

露

靈

比叡懺法 三〇
 洛北籠居 三〇
 京洛往來 三七
 御民吾 三三
 鑑
 賞餘響 三九
 近畿遊草 三九
 續草廬漫歌 四〇
 土佐路の旅 四〇
 信濃路の旅 四〇
 風雲 四四
 月皎皎 四四
 日本の道 四五
 大詔渙發 四五
 眞珠灣爆
 擊 四六
 馬來沖海戰 四六
 正義の師 四七
 防人の歌 四七
 書債
 四八
 神樂歌 四八
 香港陷落 四九
 舊稿 四九
 平安神宮 四三〇
 新年の雪 四三
 麻尼拉陷つ 四三
 心の友 四三
 大詔奉戴 四三
 春浪を思ふ 四三
 馬來席卷 四三
 擊沈 四三
 非道の敵 四三
 神

軍	四四	痛憤	四五	最後の日	四五	みたみわれ	四六	懶青楓	四六
節分	四七	緬甸攻	四七	漢屑	四八	雅懷	四八	俳僧虛白	四九
南洲遺訓	四九	新嘉坡陷落	四〇	萬歲の聲	四〇	芭蕉翁像	四一		
大兵	四二	默禱	四三	八幡詣	四三	意志の勝利	四三	藍溪會	四三
蘭印降伏	四四	陽明文庫	四四	萩すすき	四五	壽康祈願	四五		
歌集白桃	四六	明治神宮	四六	祖先の墓	四七	信濃路	四七	木	
會路	四八	山居	四八	神武天皇祭	四九	清水詣	四九	九軍神	
四〇		南方の友	四〇	夕陽居祝詞	四一	湊川神社	四一	萬葉と挿花	
四二		空襲警報	四二	壬生狂言	四三	著我の花	四三	天長節	四四
石清水八幡	四四	顯如	四四	捷報來	四五	新茶	四六	珊瑚海海戰	
四六		水無瀬詣	四七	愛宕行	四七	逢坂山	四八	豆腐の歌	四八
必殺の氣	四九	夜半翁	四九	粥座	四九	冬柏忌	五〇	天神詣	
四一		幻想	五一	死を越えて	五一	わが命	五一	撫子の花	五一
モラエス忌	四五	熱田鳴神	四六	螢籠	四六	天皇歸一	四六	流	
汗	四五	藤村先生	四五	京の雷雨	四六	祇園會	四七	空の軍神	
四七		淚骨蘭	四八	靜ころ	四八	祖父の幅	四九	薑園歌集	四九
歸臥	四八	比叡遠望	四八	大戰果	四九	再び防人の歌	四九	玉鉉	
百首	四九	大文字	四九	武藏野探勝	五〇	彼岸の蟲	五〇	栖鳳	
の死	四九	龍虎の圖	四九	蠅の歌	四九	良寛遺墨	五〇	八阪神	
社	四六	印度を思ふ	四六	天竺路次所見	四六	蟲聲唧々	四七		
歌集從軍	四六	乃木將軍	四六	伊藤左千夫	四六	一筆一喝	四六		
白櫻集	四七	陸軍葬	四七	再入院	四七	手術	四七	靜臥	四七

暗夜行路	四七	京都風土記	四七	歸廬	四三	凡兆	四四	三朝行
散策	四七	出雲路	四七	松江所見	四六	南太平洋海戰	四六	
歸洛	四七	白禱原をとめ	四七	白秋の死	四六	祇園詣	四六	爐邊
木綿以前	四七	飛雲閣	四六	竹の本	四六	東洋の凱歌	四六	
大和繪	四八	跋歌	四八					

旅塵

鎮西歌冊	四八	內海遊記	四九	四國中國	五〇	山陰素描	五一
信越流離	五四	佐渡旅情	五九	東北紀行	五八		

解説

木俣修…三二

鸚
鵡
杯



昭和5年4月發行『鸚鵡杯』
表紙 裝幀・有島生馬

薔薇と唇

薔薇の歌

かの君の言葉のなかにある刺は薔薇の刺より痛
かりしかな

吾妹子の机のうへの一輪の薔薇にも秘密あるを
知れりや

君が窓目がけて薔薇の花を投ぐをかしき戀の磔
なるかな

薔薇垣をあやふく越ゆる或る夜半の今世之介の
戀の忍び路

ほのかなる薔薇のにほひのなかにゐて死を思ふ
より樂しきはなし

吾妹子のこころを守る防人は薔薇垣つくる楯と
するべう

かの君の好む白薔薇この君のこのむ紅薔薇いづ
れ取らまし

まこと世にありと思ふやふと摘みし薔薇より起
るかかる悲劇も

封切ればえならぬ匂ひあふれ出づ薔薇畑にて書
きやしにけむ

棄てられし枯薔薇にも似し身かと云ひてなげく
と云ふはまことか

鎌倉の夜とし云へばまつ君の薔薇いろの頬の見
ゆるをかしさ

薔薇のこと書きたる後にいささかの恨みを述べ
し君が文かな

くれなゐの薔薇をこよなく好みたる鎌倉夫人い
かにおはすや

さそはれて二人入りたる温室のなか薔薇地獄の
熱かりしかな

皿時計しづかに針のめぐるるとき窓より薔薇の匂
ひ來るとき

あはれなる戀がたりかな薔薇もてその死の床を
飾れりと云ふ

地の薔薇もやさしくものを云ふ薔薇もともに夢
見るはつ夏は來ぬ

纖手魔手

たはむれにわれを打つ手と無残にも文を裂く手
とおなじ寂しさ

はたはたと扇つかへる白き手のためにこよひも
もの思ひする

杯を取る手かすかにふるへけりふたび會はぬ
君と思へば

わがまへを影のごとくにゆき過ぎぬ黒手套の通
り魔の君

怖ろしき手なりきわれをうつくしき夢に夜毎に
誘ひたまへど

文がらを棄つるがごとく放ちたる昨夜の手なれ
ど今日も取りたる

氷よりさらに冷たき君が手と熱きわが手と觸れ
しをかしさ

まづおもひ出づるは君が手にあらずむかし紫朝
が撥を持てる手

狂ほしく馬^ば樂^{らく}手を振りものを云ふ姿も見せぬ夜
のまぼろし

君が手を落ちて碎けし皿のごとあはれわが戀や
ぶれけるはや

杯に酒あり項^{うで}捲^まく手ありとしも見たるもわかき
日の夢

夜の灯

夜の灯^ひはなつかしきかなともすれば君の瞳のご
とく潤めば

夜の灯を見て涙ぐむ君が癖いつしかわれにうつ
りぬるかな

夜の灯はわれの祕密を知りぬるや嘲けるごとく
またたきをする

夜の灯を君の瞳とおもふまで夢見ごちになり
しわれかな

夜の灯を戀ふるやあらずその灯よりさらにはか
なきかの君を戀ふ

夜の灯のひとつびとつに思ひ出のある心地して
なつかしきかな

夜の灯を見てあるほどに旅ごち死よりも寒く
胸にきたれる

夜となれば切^{せつ}に都の灯を戀ひぬむかしの癖の失
せぬわれかな

火^ひ蛾^{とりむし}火に入りて死ねわれもまたかの灯の海に
入りて死なまし

むかひあてかたみにものを思ふらむ瞬^{またた}ける灯と
またたける目と

灯に酔ふやいなあらずかの帶の光琳波のま
ばゆさに酔ふ

鎌倉哀歌

鎌倉はわれの第二のふるさとと聲うるませてか
こちけるかな

封切れば海のにほひもあふれ出づ鎌倉ぶみはな
つかしき文

運命が丘と名づけてい往きたる砂山いかに鎌倉
の夏

鎌倉の海を戀しと思へばか夜ごとあやしき潮鳴
を聴く

夏來れば都大路をゆくときも鎌倉の海のまぼろ
しを見る

滑川その川べりの蘆蔭に棄てられびとの釣を
する夏

鎌倉の八幡宮の石段も君とのぼればたそがれに
けり

來よと云ふ戀の合圖のごとくにもとし火うご
く山莊の窓

君にわかれかの山莊の灯に別れさびしくかへる
夜の道かな

鎌倉に來れど君なき寂しさにひとりはかなく裏
山をゆく

なでしこに似しひと百合に似しひとと鎌倉びと
を花にたとふる

鎌倉のとある夕のにはか雨かの忘れぬ雨をお
もひぬ

哥薩克^{ゴサック}を讀みてはるかに髯白^{ひげしろ}の露西亞翁^{ろしあおきな}を戀ひ
しはつ夏

砂山^{さやま}にも思ふ人のかげ見えて獨歩^{どっぽ}の夏となり
にけるかな

鎌倉^{かまくら}のわがおもひでのなかにありてかがやかな
りや向日葵^{ひぐるま}の花

砂山^{さやま}もかたち變りぬかの君^{きみ}の面^{おもて}がはりほど寂し
からねど

鎌倉^{かまくら}の海^{うみ}のみ知れる祕めごとのありてさびしく
夏も終りぬ

月見草^{つきくさ}ほのかに咲ける丘^{かみ}もあり海もあれどもも
の足らぬ夜よ

鎌倉^{かまくら}のむかしの夢の道はよし向日葵^{ひぐるま}の道なでし
この道

そのかみの扇^{あふぎ}が谷^やの山莊^{さんじやう}のわかれに降りし雨に
似る雨

寝て聽けばわが心にも降るごとし君來ぬ夜の鎌
倉の雨

鎌倉^{かまくら}の名越^{なご}の里^{さと}の君の家^{いへ}祕めごと多き君のかの
家

おもひでに慰められてありと云ふ鎌倉妻^{かまくらつま}はあは
れなるかな

明 眸

この君の瞳^{ひとみ}の海^{うみ}に溺れ死ぬこともやあるとひと
り怖るる

いざさらば直^{ただ}ちに解けと云ふごとく君の瞳^{ひとみ}の奥
にある謎

夜となればまたきあまり繁くして瞳の謎の解
きがたきかな

しづかなる夜なりきふたり言葉なくただ瞳のみ
ものを語れる

明眸めいぼうの禍わざはひひを説く友ありて酒場さかばありきもおもし
ろきかな

うばたまの夜の闇より暗かりきうたがひを持つ
君の瞳は

忘れめや銀座の夜のゆきずりに稻妻のごと見た
る瞳を

ともすれば冷たき笑えみを見するゆゑ瞳も寒く思は
れしかな

うつくしき瞳の曇ることをのみ怖れてありぬ君
にむかひて

秋空あきぞらに似て澄みわたる瞳よりつめたきはなしは
かなきはなし

頼りなき瞳なるかなわが言ことも聴かでさあらぬ方かた
を見つむる

かのひとの瞳に秋を感じぬと友はをかしやし
みと云ふ

うつされて幾年いくとせ経ぬるわが身ぞや秋の女のさむ
き瞳に

涼しき目持つ子もとめてわれ往けば好すきありきと
や人の云ふらむ

秋のころ

そのかみの浪華なみはあたりのさすらひの旅ごこちも
て秋風を聴く

おもひでを語らはましと云ふごとく秋風きたる
京のかたより

秋の風船場少女が人知れぬ思ひを秘めし胸も吹
くらむ

秋風に耳かたむけてひとりぬ萬葉集の歌びと
のごと

みづからを嘲けるところ起りたり秋のゆふべの
もののまぎれに

寂しきは人ばかりかは秋來れば風も歎けり雲も
なげけり

わがまへの酒つめたしと思ふ間にはやくもきた
る人の世の秋

そのかみの無頼の友もなつかしきこちするか
な秋のゆふべは

秋來れば紅蓮の翁の古衾など目にうかび酔ひが
たきかな

そのむかし市井無頼のなかにゐて流しし涙わす
れかねつも

淺草にかの狂馬樂住みしころ秋風いたく身に染
みしころ

今日もまた空しく過ぐとかちつつ秋風を聴く
秋空を見る

そのかみの戀の猛者にも秋は來ぬうしろ姿の寒
げなるかな

いつの秋いつの寂しき旅なりしもみち落葉を踏
みてゆきしは

はなやかにその日その日を送りたるころのこと
など目に浮ぶ秋